

2016年3月 東京大学東洋文化研究所定年退職

2016年6月 東京大学名誉教授

極私的イスラーム研究

私は一応イスラーム研究者と皆さんに思われているわけですが、そうは言っても、イスラームの研究を始めたのは大学、むしろ大学院に入ってから話です。ですから、私がイスラームの研究をするようになった道筋は、その前に私がどんな人間だったのかということとも関係してくるのではないかと考えています。ですから、今日の話は年寄りの昔話のような感じになってしまうかもしれません。そうなってしまえば、それも事実ですからそれで諦めていただきたいと思います。研究者としての私を判断するのであれば、大したものも書いていませんが、私がこれまでに書き散らした論文類を読んでいただいて、そこから判断していただくしかないと思います。今日お話しすることは、ですから、それらの論文のなかで書いてきたことに直接関わるものではなく、私がそのようなイスラームについての論文を書く前の私の心の有り様とでもいうか、イスラーム研究に至る前段階を中心に少しお話しすることができればと考えています。

それで、一応時間軸に沿う形で、1. 研究以前、2. 宗教学、3. イスラーム研究、4. 研究の視野の拡大、という4つの節に分けて話を進めたいと思います。

1. 研究以前（～東京大学教養学部）

私の育った家は、仏壇も神棚もない家でした。四国の片田舎で生まれた父が百姓になるのを嫌い立身出世を目指し刻苦勉強して官僚になり、私が生まれた年に建てた小さな家で、いわゆる宗教的な関わりというのが一切ない、そういう家でした。仏壇も私の父が亡くなった時に、「位牌を置くのにやっぱり仏壇ぐらいないとまずいのではないか」と考え、仏壇を買って来たという、その程度の家です。ですから、そういう意味では私の兄妹をはじめ、宗教などというそんな変なものに興味をもつ者はいないというのがうちの状況でした。日本の全体から見るとある意味では普通のうちかもしれないですね。日本で宗教を研究している人は、何らかの教会や教団に関わっている方が多いという印象がありますが、日本全体をみると、宗教団体に関わっている人の方がはるかに少ないですから、大多数の世俗の人間から見ればそのような研究者はかえって不思議な人たちではないのかという気がしています。ですから、その意味では世俗社会のまっただなかにいる普通の私が宗教をやるということが、むしろ奇妙なことかなと思うわけです。

このような環境にあった私がなぜ宗教に興味をもつようになったのかいろいろ考えてみると、伝統的な村落共同体の中に生きる宗教への関心のようなものがあるのです。中学生の時に、それまではほとんど付き合いのなかった親戚の大学生が、親しく出入りするようになったのです。その親戚のうちはいわゆる「近江商人」の系譜にあり、今も近江に大きな古い家をもって暮らしています。その家に遊びに行ったりするうちに、何か昔からの風俗、習慣の中に生きている生活というのが見えてくるのです。お寺とか神社とかさらには路傍のお地藏様までがもう本当に生活の中に入り込んでいますし、1週間ぐらい遊びに行くと、そのうち一晩くらいはお灯明番という、部落の神社の本殿にろうそくの火を灯す係がまわってきます。今でこそ世の中は明るくなっていますが、もう50年以上前の話ですから、夜は本当に真っ暗で何も見えないのです。提灯か何かをぶら下げて神社に行くのですが、その神社というのが何かよく分からないのですが、すごく怖いのです。土

地の人たちに言わせると、「神社は確かに怖い。人がいないから。逆にお墓は人の魂がたくさんいるからにぎやかで楽しい」と、そのような言い方もしていました。その家のある集落は昔から人が亡くなったら集落のはずれにある焼き場で火葬にする習慣でしたが、同じ地域でも隣接する集落には両墓制を維持していました。両墓制は日本民俗学でかなり研究されているようですが、人が亡くなったらその体は埋め墓といたりする何にもない原っぱのようなところで、そこに土葬します。埋めた後はとくになにもしないようで、以後の年忌法要などは近所にあるお寺の墓地にあるお墓でおこなうということでした。そういうふうな、都会に住んでいる我々には想像もつかないような、でも、すごく魅力的な生活があったのです。そういう古来の伝統の生きている生活を垣間見、いろいろ本を読んだりすると、結局、柳田國男とか折口信夫とかの名前に行き着くわけです。そういう名前を知り、本屋へ行くと確かにそんな人の著作があるなどというのを知ったのが、大体私が中学生から高校生の頃です。それで、私のひとつの関心のもち様というのが、民間信仰的なそういう宗教のあり方でした。むしろ、伝統的な村落に生きる信仰の姿が私の関心を宗教に向けたといえるかもしれません。

私が高校1年の頃、たまたま新聞を見ていたら、東京教育大学で日本民俗学の講習会を1週間行うという案内が出ていました。東京教育大学は非常にユニークなところで、日本民俗学を専攻することのできる珍しい国立大学だったのです。その頃はとにかくそういうことに興味があったので、大塚の教育大の事務の窓口へ行って、「高校生なんですけどいいですか」と聞いたら、向こうも「駄目だ」とはやはり言い切れなかったのでしょうかね、「どうぞ、どうぞ」というので、申し込み、夏の1週間毎日朝から、いわば集中講義ですね、大塚まで通いました。宮田登さんという後の筑波大学の民俗学の先生が、その時は教育大の助手で、講義を1コマもっておられました。そんなふうに関心にも身も心も献げたような高校生だったのです。

ただ、高校生として、自分の行っている高校ではどうだったかということ、それはもう今から思うと悲惨な生活を送っていたような気がします。高校に通って朝から3時過ぎまで授業で6時間以上、校内に滞在していましたが、誰ともしゃべることもなく、朝から昼過ぎまでほとんど無言で過ごし、終わると同時に帰ってしまうという、かなり危ない生活をしていたような気がします。そんな生活をしてる子どもだったので、やはり生きているのがそれなりに苦しかったのだと思います。

その頃は実際に坐禅をすることはなかったのですが、禅だとか仏教だとか、そういうものにも心が惹かれていた時代でした。結局、民間信仰的な宗教に対する関心と、自分の内心の問題につながる禅だとか仏教だとかへの関心という、その2つの方向に気持ちをひきずられていたのですね。高校3年でそろそろ大学受験だ、となった時に、担任の先生との個人面接で「私は大学で宗教学を勉強したい」と言いました。普通、こんなことを生徒が言うと、先生はびっくりするのではないかと思うのですが、その先生はよくできた人で、静かに聞いてくれて、たまたまその高校に宗教学を出た先生がいたらしくて、「その人にもちょっと聞いてみなさい」というようなことを言ってくれました。後で知ったのですが、その方は無教会のクリスチャンの方で、宗教には理解があった方だったように思います。

ここで、お配りしたプリントをご覧ください。

——購書記録抜粋——

- ・昭和40 中学2年～3年：関口真大『禅とは何か』古田紹欽『宗教とは何か』『柳田國男対談集』
- ・昭和41 中学3年～高校1年：柳田國男『桃太郎の誕生』『菅真澄遊覧記』折口信夫『古代研究』

- ・昭和42 高校1～2年:レビ・ブリュル『未開社会の思惟』『臨濟録』堀一郎『民間信仰』宇野円空『宗教学』
- ・昭和43 高校2～3年:今北洪川『禅海一瀾』『道元禅師清規』オットー『聖なるもの』『正法眼蔵随聞記』
- ・昭和44 高校3年～浪人:宇井伯寿『仏教思想の基礎』ジェイムズ『宗教的経験の諸相』鈴木大拙全集』
- ・昭和45 浪人～大学1年:『方法序説』『ラオコオン』石田英一郎『新版河童駒引考』『玉勝間』『大乘起信論』
- ・昭和46 大学1年～2年:『キリストにならいて』『妙好人伝』『コーラン』『創世記』蒲生礼一『イスラーム』
- ・昭和47 大学2年～3年:友枝龍太郎『朱子の思想形成』Guillaume, *Islam* Cowan, *An Introduction to Modern Literary Arabic* Watt, *Islamic Philosophy and Theology*
- ・昭和48 大学3年～4年:玉城康四郎『中国仏教思想の形成1』Wright, *A Grammar of the Arabic Language* F. Rahman, *Islam* Corbin, *Histoire de la philosophie islamique 1* Hava, *al-Farā'id* H. Wehr, *A Dictionary of Modern Written Arabic* ワット『ムハンマド』井筒俊彦『意味の構造』平田篤胤『俗神道大意』T.J. de Boer『回教哲学史』Shorter *Encyclopaedia of Islam* Gibb, *Mohammedanism* Watt, *Bell's Introduction to the Qur'an* 藤本勝次『マホメット ユダヤ人との抗争』

購書記録を見ると、読んではいなくとも自分の関心の推移が分かり、我ながらおもしろいですね。中学2年、3年で、禅だとか宗教とかの本に興味を示している。読んでいるかどうかは別で、レビ・ブリュルの『未開社会の思惟』なんて、もうタイトルに惹かれて買ったのだと思います。それと同時に『臨濟録』があったり、堀一郎の本があったり、更に、宇野円空の『宗教学』など、かなり偏った関心ですね。

ちょうど私が高校3年の時は東京大学その他が大学闘争/紛争で大荒れに荒れていたため、東京大学は入学試験をおこなうことができませんでした。それなら近江の親戚も近いし、宗教関係の講義もあるので、京都大学もいいかなと思い、文学部を受けました。結果としては予想通り「お前なんか来なくていいよ」と言われ、1年間浪人をして、東大の文科3類という文学部などに進学する課程に入りました。

東大の駒場キャンパスには坐禅をする会があって、坐るのもいいかかと思って顔を出してみたのですが、何年も人間との付き合いもうまく取れずに生きてきた人間が、突然濃密な人間関係の場に押し込められたようで、ついて行けず脱落しました。それ以後、一種、坐禅に対する嫌悪感のようなものが長々続いていました。十数年前に同僚の丘山新さんに誘われて坐るようになり、これは今もつづいているので、あんがい本当には嫌いではなかったのかもしれない。

教養学部（駒場）では、いろいろな授業を取りましたが、平川祐弘、柳川啓一、玉城康四郎という、3人の方の名前を挙げておきます。後のお二人は文学部の先生です。皆さんご存じの方も多いかと思いますが、平川先生は駒場の比較文化・比較文学の方です。日本や西洋のこととか、そこら辺のあわいをうまく面白く議論したりする才能のある方です。その方のゼミに出て非常に面白く思ったわけです。彼はフランスやイタリアに留学していた、そういう意味での西洋的な知識人でもあり、日本やせいぜい震旦・天竺どまりだった私の関心を西洋の学問・文化にまでひろげてくれたように思います。次の柳川啓一、これは文学部の宗教学の先生です。学生がこういうゼミをやってほしいということを言うと、事務だか学生団体だかが仲介して、その先生に連絡を取って、その先生がOKを出せば、自主ゼミという形で単位の出るゼミになるのです。東大紛争の後の学生対応のひとつだったのでしょう。民俗学的なものにもずっと興味があったわけですから、それで手を挙げて、「こういうことをやってほしい」と言ったら、柳川先生に連絡をつけてくれて、先生は「いいですよ」と言ってくれたのです。柳川先生が『柳田國男と折口信夫』という題でゼミをやりましよう」と言ってくれて、それなりに勉強というか、大学の雰囲気を楽しんだりしたわけです。もう1人は玉城康四郎。この方は文学部のインド哲学仏教学の先生で、宗教学会でも晩年までよく発表されていて、宗教学の悪ガキ連は、「玉城先生の発表は面白い。あれは宗教をやっているからぜひ見ておくべきだ」と言っていました。本当に宗教、思想の中に入り込んでものを考えていくという方で独特の魅力をもっていました。その方がたまたま文学部の駒場への持ち出し講義の形で半年の講義をされ、それが『大乘起信論』についてでした。はっきり言って、それが非常に深く私の心に刺さったのです。

そろそろ文学部に行って、専門を何にするか決めなければいけないという段階の私の有り様は、相変わらずまとまりのつかないものでした。民間信仰的な宗教にも興味がある。他方、大乘起信論の研究のような形で坐禅や仏教につながる関心もある。さらにちょっとは西洋の学問にも興味があった。英語は不得意科目でしたが、ドイツ語、フランス語などは割にまじめにやっていたし、ラテン語、ギリシャ語などもかじったりしました。これは西洋的なものに対する関心がそれなりに出てきたということだったと思っています。そういう具合に西洋のもの、民間信仰的なもの、あるいは仏教的なものといういくつかの方向に向かい、私の関心は取捨がつかない状況だったと思っています。私の興味を惹くさまざまのものは、多分「宗教」を軸としてそのまわりに散らばっている現象だろうと思いつけることにし、とりあえず宗教学宗教史学に行こうということにしました。

2. 宗教学（東京大学文学部・人文系大学院 宗教学）

宗教の研究ということだけで宗教学に行ったわけです。その年は宗教学に来る学生が多かったようで、10人ぐらいいたかと思っています。最初のガイダンスで、先生方が「皆さんは、何をやりたいのですか？」と聞くわけです。私は何と答えようか、はっきり言って困りました。先ほどの3つの心の中のベクトルとは必ずしも一致はしないのですが、「古代の宗教を研究したい」と、私でもよく分からないことを言ってしまいました。そうすると、先生だか他の学生だか、「古代ってどこの古代の？」とか、「日本の古代か、西洋の古典古代か」など質問され、どれにも関心があるようなないような状況でしたから、「いや、それもよく分かりません」と情けない答えしか私にはできなかったのを覚えています。

宗教学の授業も取るのですけれども、宗教学の授業というのはなぜかどれもあまり面白くなかつ

たのです。それに対してこのころ私が興味をもって聞いていたのは、印哲の仏教関係の授業とか、あるいは中哲の特に宋学ですね、そういう授業を喜んで聞いていました。そんなことをやっていくうちに、宗教学の研究室の新入生歓迎会だかなにか別の会合だったかがあり、そのなかで自由に歓談する時間になって柳川先生が寄ってきて、「君、イスラームをやらんかね？」というようなことを言うのです。そうは言っても、イスラームといわれても何も知らないわけです。何にも知らないのに「嫌です」と断る理由もないですから、「よく分かりませんが、ちょっと考えてみます」みたいな返事をしてしまいました。断ることのできない気の弱さが身を誤るいい例です。「イスラームとはコーランだな」と思い、とりあえず読んでみよう、岩波文庫の井筒俊彦の訳で上巻から読んでみたのです。読み始めてみましたが、はっきりいってつまらないのです。なんとか上巻は読んだのですが、更に読もうという気が起きず、挫折しました。当時の私にはクルアーンをおもしろがる力が無かったのです。「こんな面白くないもので、なんで研究書があるんだろう」というふうに思ったのも確かです。ただ、その他にイスラーム関係の概論書とか入門書なんかも読んだりしていくと、イスラームの中にもスーフイズムという神秘主義の潮流があるということが言われていて、キリスト教の神秘主義や、あるいは仏教などもつながるようなものがあるというのをなんとなく読んだか感じたかしました。

イスラームのそんな雰囲気は少し分かってきましたが、答えは出ない。しかし語学は必要だということで、イスラームをやるかやらないかまだ分からないが、とりあえず、アラビア語をやってみようかと考えたわけです。駒場時代にギリシャ語やラテン語をちょっとかじったり、悪いことに文学部に進学した時に、後藤光一郎先生というもう1人の宗教学の先生のヘブライ語の授業にも出ていたのです。そんなことから「あいつはなんか語学が好きらしい。アラビア語くらいいいだろう」というふうにもしかしたら思われたのかもしれないですね。いずれにせよ、そんなことでアラビア語もやってみようというふうに思ったわけです。ただ、もうそういう話も出た時は学期の途中ですから、今さらアラビア語の授業に出るのもおかしいということで、その場はそれっきりにしていました。東大ではその時には、東京外大のアラビア語の先生の牧野信也さんという、井筒俊彦のお弟子さんでもある方が週1回のアラビア語の授業をしに来られていました。その頃、私は森有正のものなどもちょっと好きで読んでいまして、彼がどこかで「語学はやっぱり10代に始めないと身につかない」というようなことを書いていました。それならアラビア語も早く始めた方がいいなという気になったのです。これはやはり人の期待に対して過剰適応しており、健全ではないなとは思っています。アラビア語の教科書でその頃よく使われていたもので、*David Cowan, An Introduction to Modern Literary Arabic* という英語のアラビア語教科書を買ってきて、それを独学したのです。大学3年の学期が終わって、2月から4月までの春休みの間にその本を読んだのです。どれだけ頭に入ったか分かりませんが。そして、新年度の4月から牧野先生のアラビア語入門の授業に出て、更に当時、中村廣治郎先生が東大に付置された東洋文化研究所の助教授に来て1、2年の頃で彼が大学院でアラビア語のテキストを読む演習をされていたので、それにも出させてもらいました。単位にはならないにも関わらず、学部の4年の時に大学院の授業に出て、アラビア語のテキストを読みました。それはもう本当に地獄のような毎日でした。おそらく1時間の講義の予習のために、それ以外のすべての日時が消えていたという、そんな状況でした。その授業は私の他に、後に金沢大学で教えられたエチオピア語を専門にされている言語学の柘植洋一さんとか、ちょっと年のいった東洋史の学生さんなどが出ていました。いくら予習をしても何だかわからないし、出ていても、だんだん身が小さくなるような、そういう毎日でした。先生やその学生さんたちともほとんど話もでき

ないような状況で顔を出していました。

そんなことをやっていたのですが、結局もうなんとなく「あいつはイスラームをやるんだ」ということになってしまっているようで、私も別にそれ以外に「これをやりたい」というものが出てきたわけでもなかったの、とりあえずイスラームをもう少し続けてみようかということで、宗教学の修士課程に進みました。とにかくアラビア語はやらなければいけないと思っていたので、修士の1年の時に、東京にあるアジア・アフリカ語学院という、アジア関係の非常にマイナーな言葉を教える学校の夜学のアラビア語コースに1年間通いました。最初は7、8人の学生がいたと思いますが、最終的に残っていたのは3人だったと思います。それで、私の他に残っていた人のひとりが、一橋大学から来ていた加藤博さんでした。でも、加藤さんは、そのアジア・アフリカ語学院で初めて会ったわけではなく、その前年の牧野信也先生の授業に聴講に来ていたのでなんとなく覚えていました。牧野先生の授業は今から考えるとかなり乱暴な授業で、教科書はドイツ語の教科書を使っていました。ドイツ語でしかも、ひげ文字と言うのですか、今ときはまずお目にかかることのない書体で書かれていました。教科書そのものはドイツではよく使うものらしく、Ernst Harder, *Arabische Sprachlehre* というもので、今でも Annemarie Schimmel による改訂版が出ています。先生は「ドイツ語は別に読めなくても僕が説明するから」と言われていましたが、それは無理ですよ。はじめは20~30人いたように思いますが、1回ごとに半分に減って、夏休み前には2人だけになって、その1人が加藤さんでしたが、夏休みが明けると彼もいなくなって、それから1月までは結局、私は一対一で牧野先生のアラビア語を受け通しました。とにかくそんなことで、宗教学で4年の頃はただひたすらもう単位にもならないアラビア語で苦しんだということです。

同時に、卒業はしなければいけませんから、卒業のための論文を書かないわけにもいかないわけです。その頃の宗教学の課程では、卒業論文の代わりに卒業研究という形で卒業するシステムがあって、それは英語の本を2冊読んで、それぞれの感想みたいなものを書き、さらに、1つ短くていいが、論文を書けというものです。卒業論文という形で立派なものを1つどんと書くという自信がなかったので、卒業研究を私は選びました。その時の課題図書だったのは Henri Frankfort, *Before Philosophy* という、古代オリエントの宗教を論じた書物と、Wilfred Cantwell Smith, *The Meaning and End of Religion* という、イスラームを宗教学的に論じたものでした。後者は最近になって日本語訳が出た(保呂篤彦・山田庄太郎(訳)『宗教の意味と終極』)書物です。これらの本を読むのも案外大変でしたが、読んだことが分かるくらいの作文は出せたと思います。もう1つの論文については、玉城康四郎先生が「若いうちにぜひ大乘起信論をちゃんと読んでおけ」というようなことを授業の中で言われていたのを覚えていたので、大乘起信論をとにかく読もうということで、自分なりに一生懸命読んで論文を書きました。『宗教思想に於ける心の問題——大乘起信論の事例を通して——』というものです。イスラーム研究という彼岸に渡る前に此岸に存在した証しとして残そうとしたのがこのささやかな論文でした。

大学院ではスーフィズムを研究することにしました。スーフィズムはペルシア文学にも大きな影響を与えていると知り、ペルシア語も勉強しないとイケないというので、東京外国語大学の黒柳恒男先生が東大でされていたペルシア語の授業をとりました。そこでは、普段接することのないような東洋史の方たちにも触れる機会があり、よかったと思っています。上智大学で長く教えられた小牧昌平さんと知りあったのはここでした。

文学部の時代には宗教学の授業よりも、むしろ印哲や中哲の授業を面白く聞いたと言いましたが、実はその時に宗教学の集中講義で京都大学の武内義範先生が夏と冬、1週間ずつ東大に講義に

来られたことがありました。それを聞いて非常に面白かったというか、何か心に響くものがありました。東大の宗教学とはちがって哲学的な理解を重視するところに惹かれたのではないかと考えています。

修士の2年目に修士論文を書くことになり、とにかくアラビア語を読んで何か書かなければいけない。でも、宗教学の範囲で議論をしていきたい。そのため、イスラームの中で、これは明らかに宗教的だと言えるような主題を選んで書こうと考えて、浮かび上がったのが神秘階梯の議論です。神秘階梯論は、人間の魂が通常の状態、あるいは最初の状態からだんだん高いレベルに上がっていくと考え、どのようなプロセスを経て完成して、最終的に神とひとつになるのか、を論じます。このような議論をイスラーム神秘主義の中に見ようと思ったのです。その頃はアラビア語のイスラーム文献が何でも自由に手に入るわけでもないので、多分文献が手に入るだろうということで、クシャイリーとかサッラージュとかフジュウィーリーとかの初期のスーフィズム綱要書を読んでそのなかの神秘階梯の議論を取り出し、並列すれば、イスラームの神秘階梯はこういうものだと議論ができるかなと思いました。この論文の目論見を指導教官の中村廣治郎先生に話すと、あまりいい顔をされないので。そういうふうに部分、部分をちょっとつまんで、それを並べて論文にするというのが少し安易かなと思われたのかもしれませんが。その話をした時かどうか覚えていませんが、中村先生が私にサッラージュの *Kitāb al-Luma'* (『閃光の書』) というアラビア語の書物、「これをお前にやるから読め」と言われたのです。いただいたのはエジプト出版のものでした。サッラージュの書物の引用には、ニコルソン (R. A. Nicholson, 1868-1945. 長らくケンブリッジ大学教授を務めた) が校訂した本を使うのが普通です。ニコルソンの拠った写本に数葉の欠落があり、そのため彼の校訂本には抜けているところがあるのですが、エジプト版はそこを補っているので、一応それ1冊でテキスト全体をカバーできる利点がありました。とにかくそれを読むことを始めたのですが、修士2年目の春から秋口にかけて、その数カ月はもうそのアラビア語読みで朝から晩まで起きている時間のほとんどを費やしたという感じでした。ただ、あるスーフィーのテキストを引用している数ページはいくら読んでも歯が立たず、その部分は残念ながら知らんぷりして修士論文を書きました。このように四苦八苦して書いた修士論文の一部が『オリエント』に掲載された「サッラージュの神秘階梯説」です。宗教学の論法で料理できるイスラームの局面を選んで論文にしたというものです。

3. イスラーム研究

その頃はイスラーム研究をするのであれば、修士論文を書いた後はどこか外国へでも行かなければものにならないという雰囲気、暗黙の圧力、があって、英語はもちろん日本語ですらしゃべるのは不得手の私がどこか行き先を考えなければいけないことになったのです。留学準備で英会話の学校に通ったりしながら、鎌田茂雄先生の華嚴文献の講読に出たりしているうちに、幸いカナダ政府の奨学金がもらえて、モントリオールにあるマッギル大学に留学できました。このマッギル大学は、中東研究ではなくイスラーム研究を標榜する研究所をもつ大学でした。なお、井筒俊彦が教えていた大学ですが、私が行ったときには既にテヘランに移っていました。中東研究とイスラーム研究の区別などはどうでもいいと思われる方もおられると思います。アメリカの大学には中東研究・中近東研究を看板にするところは多いと思います。中東研究という枠の中にはイスラーム研究だけではなく、ユダヤ教の研究なども入ってきます。それに対して、このマッギルのイスラーム研究はユダヤ教の研究は入りませんが、中東の枠を超えてインドや東南アジアのイスラームも視野にいれ

るものでした。イスラームを基軸にして1つの学問の体系を形成しようと考えていたのだと思っています。私自身は行くまでそのようなことは考えませんでした。行って、そしていろんな人に聞いてみると、ここはイスラーム研究をするところだから私は来たんだというムスリムの学生が随分いました。その意味で北米の中でもマッジルはちょっと特徴のある研究教育機関だったと思います。

その関係で1つお目にかけたいのが、「東京大学イスラーム学研究室図書分類表」です。

<<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/Islam/library/>>

イスラーム学図書分類表

分野コード	分野	保管場所	分野コード	分野	保管場所
C1	概説書・論文集	イスラーム学赤門 845	AB	文献索引類	イスラーム学赤門 849
C2	クルアーン	イスラーム学赤門 845		ABIS (イスラーム)	
C3	ムハンマド	イスラーム学赤門 845		ABAR (アラブ)	
C4	ハディース	イスラーム学赤門 845		ABIR (イラン)	
C5	イスラーム法	イスラーム学赤門 845	AC	年表類	イスラーム学赤門 849
C6	神学・哲学	イスラーム学赤門 845	AE	百科事典類	イスラーム学赤門 849
C7	スーフィズム	イスラーム学赤門 845		ABIS (イスラーム)	
C8	分派	イスラーム学赤門 845		ABAR (アラブ)	
	C81 (スンニー派)			ABIR (イラン)	
	C82 (スンニー派)			ABTU (トルコ)	
C9	歴史	3号館		ABME (中東)	
C10	地理・旅行記・人類学	3号館	AL	語学類	イスラーム学赤門 849
C11	文学	3号館		ALDa (アラビア語辞書)	
C12	芸術・科学	イスラーム学赤門 845		ALGa (アラビア語文法書)	
C13	科学	イスラーム学赤門 845		ALDp (ペルシア語辞書)	
M	近現代	イスラーム学赤門 845		ALGp (ペルシア語文法書)	
				ALDt (トルコ語辞書)	
				ALGt (トルコ語文法書)	
			AM	地図類	イスラーム学赤門 849
			AP	定期刊行物類	イスラーム学赤門 838
			B	宗教一般、ブレイスラム、非イスラーム	3号館

これは東大のイスラーム学研究室で配架されている本の分類を示したものです。実はこれは私がこの研究室の最初の助手(1982-84年)になった時に、「ここの本の分類からすべてお前がやれ」ということで作った分類表です。この分類表は実は私が何かしたというのではなく、マッジルのイスラーム学研究所で採用していた——マッジルのイスラーム学で作り上げた——分類表です。古典期イスラームという枠を示すCという記号の部でよく分かると思います。C-1は総論ですが、以下最初のC-2でクルアーンがあり、そして、引き続き、ムハンマド、ハディース、イスラーム法、神学、哲学、スーフィズム、そして更に分派というような、こういう分け方になっています。これはいわばイスラームの考え方に基づいたイスラーム内の諸学問のあり方を適切に表現している、そういう分類です。分かりやすい例をひくならば、東京大学の東洋文化研究所や、京都大学の人文科学研究所など中国研究の長い伝統をもつ研究機関はたくさんの漢籍を所蔵しています。そういった漢籍は経史子集の四部に分ける四部分類という伝統的な、もちろん儒教を強調するような分類だとは思いますが、よくできた分類法で分類されています。いわば、その四部分類に相当するようなイスラーム版の分類だと考えていいと思います。そういう意味でこの分類は中東研究ではないイスラーム研究の場の分類としてよく考えられたものだと思います。それもあって、東大イスラーム学研

研究室の本を分類する時に私はマッギルの分類の根幹を採用しました。このような点に端的に現れているようにマッギルがイスラームの価値観を尊重しながら学問的に厳格に研究を進めようとしており、北米でも特色ある研究教育機関であったように思っています。なお、よく考えられた分類法ですが、マッギルのイスラーム図書分類はマッギルの研究所以外では採用されず、あまりに特殊であるとの理由で、残念ながら、今ではアメリカ議会図書館(LC)の分類法に置き換えられてしまっています。

カナダに行く前、東大で勉強していた頃、アラビア語の授業こそありましたが、イスラームについての授業は、1学期に1つあるかないかでした。今はイスラームに関連する専門課程をもつ大学はもちろん、そこまでいかない大学でもイスラームについての講義を置く大学も多く、あの頃とは隔世の感があります。しかもその頃は、私は宗教の研究をするのだという意識が非常に強かったのです。ですから、東洋史関係ではイスラームの歴史に関する授業もちょっとはあったのですが、それはもう私とは縁のないディシプリンだと思い込んでいました。そこで、1つか2つの数少ないイスラームに関する授業を取り、あとは宗教学で修士号を取るために宗教学関係の授業も取らないといけませんから、日本の宗教の話とか、あるいは、イスラームにも近いということで後藤光一郎先生のヘブライ語の授業を何年も取っていたと思います。何年も取った割にはヘブライ語は一向身につかなかったのですが。日本で勉強していた時には、イスラームの「宗教」を研究するのだ、という立場が強かったと思います。しかし、カナダへ行って勉強しだすと、イスラームの宗教に研究関心をしぼるような余裕もなく、イスラームの文化のあらゆるもの、日本では見向きもしなかった歴史のテキストを始め、文学作品も読みましたし、哲学、神学、クルアーン註釈など、多彩なイスラーム文献にふれるような授業を受けることになったのです。しかも、学生もいろいろなところから来ていました。日本にいるときには「イスラームはスンニー派とシーア派に分かれます。シーア派には更には小さなグループとして、例えば、イスマーイール派というグループなどがあります」というふうに頭の中で理解しているだけでした。カナダへ行くと、その研究所には、私はスンニー派、私はシーア派、私はイスマーイール派ですという、そういう人たち自身がいて一緒に勉強しているわけです。そういう意味でイスラームについての頭の中の知識だけではない、体で感じるような知識とでもいうもの、そういうものが随分得られたような気がします。それで、学生もサハラ以南のアフリカから来ている人とか、もちろんエジプト人もいました。あと、トルコ、イラン、それから、インド、パキスタン、バングラデシュの学生も多かったです。多様な人たちがいて面白かったと思います。ですから、同じムスリムだと言っても、インドのムスリムとアフリカのムスリムとイラクのムスリムは、たとえ同じスンニー派だと言っても違いがあります。文化的な多様性があるながらも、イスラームではひとつだという、そういうなにかが体感できたと思っています。

非常に運が良かったのか、あるいは、それは逆に言うと運が悪かったのかもしれないのですが、私が最初に着いた年、指導教官になっていただいたヘルマン・ランドルト(Hermann Landolt, 1935-)先生から、その年に読むテキストは「イブン・アラビーの『叡智の台座』(*Fuṣūṣ al-ḥikam*)だ」と言われて、イブン・アラビーを初めて読むことになりました。日本にいた時にも、イブン・アラビーのものはなんでも手に入れようとしていましたが、*Fuṣūṣ al-ḥikam*は手に入りませんでした。テキストを見るのもそれが初めてでした。この*Fuṣūṣ al-ḥikam*を読む演習も地獄でした。いくら読んでも分からない。しかも、教室では英語で訳さなければいけない。半年ぐらい経つと、アラビア語は私よりも遥かに勉強の量が少ない白人のカナダ人が、「だんだんイブン・アラビー、分かってきたような気がします」などと授業の時に言っているのです。私は全然分からない。それで、

「アラビア語力ではそんなに遜色がないはずなのに分からないのは、やはり英語力のせいかな」と思ったりもしました。しかし、理由がなんであれ分からないものは分からないのです。そんなこともあり、もうほとんど毎回授業が終わった後に、ランドルト先生の研究室に押しかけて、なんやかんや理由をつけて話をしていました。今考えてみると、先生の大事な時間を潰してしまったのを申し訳なく思っています。何かのときに「君も少しは分かってきたみたいだね」と言ってくれて、それはそれなりにうれしかったのですが、私自身としてはやはり分かった気がしていなかったのです。これがアラビア語のイブン・アラビーとの最初の出会いです。井筒俊彦の影響かなと思いますが、イスラームを勉強したいという若い人のなかには、イブン・アラビーを研究したいという方が時々います。相談をうければ私は難しいからやめたほうがいいといつもいのですが、私の忠告を聞く人はなぜかいません。私の忠告よりもイブン・アラビーの魔力の方が強いのは明かですからそれは当然かもしれません。

ランドルト先生はアンリ・コルバン (Henry Corbin, 1903-78. フランス高等研究実習院 (EPHE) 教授などを歴任した) の弟子筋にあたり、哲学的な神秘主義を専門にしており、マッギルでは神秘主義文献の講読とペルシア語上級の授業を担当していました。ペルシア語の授業も言葉がペルシア語であるというだけで読むものは神秘主義の文献で、留学期間中さまざまな神秘家の文献に目を通すことができ、ありがたかったですね。テヘラン大学から隔年で来られるモハッゲグ (Mehdi Mohaghegh, 1929-。テヘラン大学教授などを歴任した) 先生にはシーア神学のテキストを学びました。リトル (Donald P. Little, 1932-2017. マッギル大学教授などを歴任した) 教授の演習ではマムルーク朝の歴史書のアラビア語写本を一年間なぜか一対一で読みました。イブン・アラビーの講読のようなマイナーとしか思えない科目に10人ほどの学生が集まるのに驚きましたが、学生も多いと思っていた歴史の授業が一対一だったのにも驚きました。クルアーンの註釈については塙保己一のような盲目のアイユーブ (Mahmoud Ayoub, 1935-2021) 教授、イブヌルファーリドの神秘詩をキリスト教徒のパレスチナ人のブーラタ (Issa J Boullata, 1929-2019) 教授と読みました。

カナダでの勉強はイスラームについてできるだけ広くかつ深く学ぶという方向にあったといえるでしょう。イタリアから来ているといていたように思いますが、やや年輩の学生は、ここの学生たちはイスラームにしか興味を感じない、イスラーム以外の文化には目をむけようとしないとイスラーム学の学生たちを批判していました。それも一理あると思いましたが、イスラームのあらゆることを知りたいというのが当時の私の気持ちだったので、私にとっては聞き流すだけのコメントでした。

4. 研究の視野の拡大

その後日本に帰ってきて、東大のイスラーム学研究室の助手になり、また非常勤の講師などもほぼつやり始めました。やり始めて気がつくのは、教えるということは非常に勉強しなければいけないということでした。私は一橋大学で3年ほど非常勤講師をやったことがあるのですが、相手は経済学部や法学部の学生でしたから、イスラームの神秘主義の話をしても場ちがいではないかと思って、イスラーム法の話をしてしたりしました。イスラーム法はそれまでちゃんと勉強したこともないですから、それなりに一生懸命勉強して話をしました。学生たちにしてみればつまらない話をきかされただけだったかもしれませんが、イスラーム法の勉強をすることによって、私のほうには自分なりにイスラームの一つの姿が分かってくるところがありました。ですから、人間の日々の行動の細かいことも、やはり神の目に適う形で実践していかなければいけない。それは、一つのタウヒード

(*tawhīd*) のあり方だとも言えるわけです。ですから、単に神学だ、哲学だというレベルだけでイスラームを見るのではなく、法学という面からも同じようにイスラームを見ることができるようになってきたと思います。自分自身はあまり考えていなかったことで、こういう話をしてくれとか、あるいは、場合によってはこういう議論で論文を書いてくれと言われると、断らざるを得ないこともあります。行きがかり上受けてしまったりすると、元が無知ですから当然勉強しなければいけない。そうすると、「こんな訳の分からない、元々興味もないことをなんで私がやらなければいけないのだ」と思ったりもするのですが、勉強していくうちにだんだんこれまで自分のもっていた考え方とつながるところが出てきたりするのです。そんな形で少しずつ自分の視野とか関心が広がっていくように思いました。

先ほど学部の頃にクルアーンを読むも、読みきれずに挫折した話をしましたが、東洋英和女学院大学の渡辺和子さんに大学院で「イスラームについての講義をしてほしい」と言われたことがありました。それは宗教学関係の授業でしたが、そこはイスラームの専門家を養成するところではないですし、もちろんアラビア語も使えません。そういうところでイスラームを一番よく分かるようにするにはどうすればいいか考え、やはりクルアーンを読むことだろうということで、翻訳でクルアーンを読むことにしました。隔年に半年の授業で、期間としては十数年続けましたが、学期でいうと9学期ぐらいです。だいたい、1学期で岩波文庫の1冊を読むというペースで進みました。学生さんは毎学期変わるので、岩波文庫(井筒俊彦訳『コーラン』)の上巻・中巻・下巻のどれかしか読まないのですが、教える私としては上・中・下、全部読めるわけです。結果としては3学期でクルアーン全体を読めるので、この授業で3回クルアーンの通読ができました。もちろん予習もしないといけませんから、実質的にはもっと多いでしょう。イスラームの様々な神学であれ哲学であれ、しばしばクルアーンの引用が出てくるのですが、そんな形でクルアーンに注意しながら読むと、その引用の意味というのか、その句からどのような意味を取りだそうとしているかがなんとなく分かってくるような気がするのです。哲学や神学は論理で物事を解決しようとするのが基本ですが、クルアーンでは言葉の力でそれをある程度伝えているように思えます。モッラー・サドラー(Mullā Ṣadrā, 1640年没)という神秘哲学者は、非常に硬質な論理を使う学者ですが、しばしばクルアーンを引用します。非常に哲学的な議論で言おうとしたことを、クルアーンのメッセージ1つで伝えるという意味がそこにはあるのだと思います。イスラームの聖典とされるクルアーンをよく読むというのは当たり前と言えば当たり前ですが、イスラームの哲学や思想を主に研究している日本の研究者で、「私はクルアーンを一生懸命読んでいます」と言う人は残念ながらあまりいないと思います。その意味で、クルアーン理解を通して、イスラームの哲学なり思想なりを見ていくことが重要ではないかということ、授業という形でクルアーンを読んで来たことから、私なりに得ることができたと思っています。このように、教えたり、何か書けと言われてたりという、よそからの働きかけは、それなりに自分の研究の幅を広げるのに役に立ったと思っています。

カナダで勉強していたときは、イスラームの外への研究関心は休止状態に近かったのですが、日本に戻ってからは以前からもっていた仏教などへの関心もいくらか回復し、小さな論文などを書いたりしました。私がかつてもっていた関心の回復ともいえますが、同時にそれをおもしろがってくれる外からの影響もあったと思います。

5. 結び

私が神秘主義を研究しようと東大で修士論文を書いていた頃は、イスラームに何らかの、私の頭

の中にある「宗教」のイメージを付け加えていたと思います。それはイスラームそのものの中で、例えばスーフィズムが生まれてきたのとは違うなにかを付け加えている、そういう可能性があるような気がします。ですから、宗教を研究します、その宗教の1つとしてイスラームを選びますというような行き方よりも、やはりイスラームのありとあらゆる局面をとにかく学び、そして、その中で例えばスーフィズムがどういうふうにならぬ中で位置づけられるのかということを考えていくこと、それが重要なポイントではないかと思うようになりました。それは東大で勉強し、マッギルで勉強して、以後、なんとなく頭の中に生じてきた考え方です。

しかしながら同時に、矛盾する言い方かもしれませんが、「宗教」という眼鏡を用いることによってイスラームを見れば、やはりそこには違ったものも出てくると思うのです。ですからそういった形で、イスラーム、あるいはキリスト教、あるいは仏教、そういったものの現象を1つの眼鏡で見たら、それぞれがどういう像を描き出すかというのもまた面白い、興味がある点だろうと思っています。

ですから、イスラームそのものを理解するために、イスラームの中でスーフィズムなり哲学なりを見ていかなければいけないというのは一番重要なポイントだと思いますが、同時に、違った種類の眼鏡でいくつかのものを見ることによって、それら相互の異同がより明らかになってくるということもあると思っています。

***** 質疑応答 *****

司会 (東長靖) ご講演ありがとうございました。では、ご質問をお受けしたいと思います。

イドリス・ダヌシュマン (立命館大学) 大変興味深いお話、ありがとうございました。私はイスラーム教徒で、自身イスラームの研究をしています。私のところでは、私の授業で宗教について初めて聞いて、その後で私のゼミをとる学生がいます。そのような学生にとって、宗教、そしてイスラームを勉強することで何が人生に加わるのか。2年間かけて勉強していても、大学を出てからの仕事には直接つながらないかもしれませんが、それでも役に立つというのを言いたいのです。長い間研究された後、何かご意見はございますでしょうか。

鎌田 宗教の勉強をして何の役に立つかということですね。

イドリス 特にイスラームです。

鎌田 特にイスラームですね。当たり前の答えになるかもしれませんが、イスラームはこの現代の世界ではメジャーな宗教です。今の日本では少数派かもしれませんが、人間がどこで活動してもムスリムに出会う場はいくらでもあると思います。そういう場に居合わせた時にイスラームについての知識をもっているかないかでは随分違うと思います。ですから、イスラームについて知っているということは、学生さんが今後いるところで生きていくうえで役に立つはずだと言えます。これはやや実利的な見方になってしまったかもしれませんが。普通の日本人にとってイスラームはよく知らない宗教であり文化です。日本人がそのような異なる文化を知ることとは、